

第51章

エテル 6 - 10 章

はじめに

エテル 6 - 10 章で、モロナイは大海を渡って約束の地に行ったヤレド人の旅について語っている。その後、義になった時代と悪事と争いの時代を対比しながら、数世代の王たちの統治を要約している。モロナイは、ヤレド人とモロナイ自身の民であるニーファイ人の間に見られる多くの類似点について述べている。どちらの国民にも見られた、高慢、繁栄、悪事、悔い改めのサイクルについて語っている。また、高慢と秘密結社が社会を支配するのを許すとき、わたしたちはどのような重大な危険に身をさらすことになるかについて説明している。ニーファイ人の文明もヤレド人の文明も、人は自分がまいたものを刈り取るようになるという真理を実例によって示している。主に従うことは幸福をもたらし、主の戒めから離れることは争いと災いをもたらすのである。

注解

エテル 6:3 「男や女、子供たち……に光を与えられた」

• 主イエス・キリストはわたしたちの世界と人生を照らす光の源であられる（教義と聖約 88:5 - 13 参照）。主はヤレ



ドの兄弟が差し出した石に触れ、大海を渡るときのために「男や女、子供たち……に光を与えられた。」（エテル 6:3）同じように、主は現世の暗闇においてわたしたちの約束の地へ、すなわち輝かしい日の栄えの王国へとわたしたちを導く光を用意してくださっている。わたしたちの道は、使徒や預言者、標準聖典、靈感を受けた指導者や教師という

光によって照らされている。また、わたしたちも光となることができる。主の勧告に聞き従い、主の御霊を受けるにふさわしい状態を保つとき、ほかの人のために道を照らすことができるのである。

かつて中央若い女性会長であったアーデス・G・カップ姉妹は、次のように勧告した。「皆さんには内なる光があります。皆さんは暗闇の中で輝くことができます。世を照らすことができます。暗闇を追い払う手助けができます。違いをもたらすことができます。」（*The Joy of the Journey* [1992 年], 69）

エテル 6:4 - 9 ヤレド人は主に身を託した

• エテル 6:4 - 9 の文脈において、託すという言葉は相手の保護に身をゆだねるという意味である。言い換えれば、ヤレド人は神の保護に身をゆだねたのである。彼らは主に身



ロバート・ハレット、© 1986 IRI

を託すことによって、主は自分たちを救い出すことができになるし、また救い出してくださいという信仰を示した。「船が海上にある間、風は一度もやむことなく約束の地に向かって吹き続けた。」（エテル 6:8）ヤレド人が示したこの態度を、家族とともに海を渡ったときのニーファイの兄たちの態度と比較する。レーマンとレムエルがニーファイを縛ると、家族の羅針盤であるリアホナの働きが止まってしまい、船は「4日間、海の上を吹き戻された……」（1ニーファイ 18:15）ヤレド人もリーハイの家族も主に身を託そうとしたが、リーハイの家族の中には不従順な者たちがいた。この二つの話を比較すると、主がわたしたちを心にかけて与えようとしてくださっているすべての祝福を受けるには、信仰を働かせ、戒めを守らなければならないことが分かる。

エテル 6:8 - 12

ヤレド人が航海の間や到着後に示した模範的な行動で、あなたを鼓舞し、良い行動に促してくれるものはどれか。

エテル 6:9 「主に賛美の歌を歌った」

• 賛美の歌を聞いたり歌ったりすることによって、どのような祝福が得られるだろうか。主は現代の啓示の中で、義になった音楽を喜ぶ人々を祝福すると述べておられる（教義と聖約 25:12 参照）。大管長会は人を鼓舞する音楽の力について次のように述べている。

「賛美歌は主の御霊^{みたま}を招き、敬虔^{けいけん}な雰囲気をかもし出し、教会員を一つにし、主に賛美をささげる機会を与えてくれます。



……賛美歌は、人を悔い改めと善い行いへと駆り立て、証^{あかし}と信仰を強めてくれます。また、疲れた者を元気づけ、悲しむ者を慰め、そして最後まで堪え忍ぶように励ましを与えてくれます。……

……賛美歌は……精神を高揚させ、勇気づけ、正しい行動へと導きを与えてくれます。賛美歌は、わたしたちの心を神聖な思いで満たし、平安をもたらしてくれるのです。』（『賛美歌』9-10）

エテル 6:12 深い憐れみ^{あわれみ}

• 神の深い憐れみについて、詳しくは 1 ニーファイ 1:20 の注解（12 ページ）およびモロナイ 10:3 の注解（385 ページ）を参照する。

エテル 6:17 「彼らは主の前をへりくだって歩むことを教えられ〔た〕」

• わたしたちはヤレド人が謙遜^{けんそん}であることの大切さを教えられていたことを知っている。同じように、現代の啓示でも謙遜であることの大切さが教えられている。「あなたは謙遜でありなさい。そうすれば、主なるあなたの神は手を引いてあなたを導き、あなたの祈りに答えを与えるであろう。」（教義と聖約 112:10）

十二使徒定員会のジョセフ・B・ワースリン長老（1917 - 2008 年）は次のように説明している。「謙遜さとは、人生を最後までしっかりと歩むには主の助けに頼る必要があることを認めることです。」（『リアホナ』2004 年 11 月号, 103）

• 管理ビショップリックのリチャード・C・エッジリービショップは、忠実な教会員の基本的な特質の一つとして謙遜さを挙げている。

「こうした忠実な会員について考えるとき、全員が持っていると思われる特質が二つ思い浮かびます。一つは、社会的あるいは経済的な身分や地位に関係なく、謙遜さが主の御心^{こころ}への従順をもたらしていることです。そしてもう一つは、人生における困難や試練にもかかわらず、神の祝福と人生の善いものに対する感謝の気持ちを維持することができるということです。謙遜さと感謝は、まさに、幸福を得るための対を成す特質なのです。……

……神の王国では、偉大さは謙遜さと従順から始まるのです。対になっているこれらの徳は、神の祝福と神権の力への扉を開く第一の重要な段階です。何者であろうと、あるいは肩書きがどれほど立派なものに思われようと関係ないのです。主に対する謙遜さと従順こそが、感謝の心とともに、強さと希望をもたらすのです。」（『リアホナ』2003 年 11 月号, 98 参照）

エテル 6:17

謙遜^{けんそん}さと、主から教えや勧告を受けることにはどのような関係があるか。

エテル 6:17 「天から……教えを受けた」

• 「天から……教えを受け〔る〕」ためには、戒めを守り、聖霊を伴侶として靈感を受けるにふさわしくなければなりません。十二使徒定員会のリチャード・G・スコット長老は、御霊^{みたま}によって教えを受けることの祝福について次のように説明している。「どのような試練に遭うときでも、皆さんは心の中に自分を支えてくれる静かな気持ちを感じるでしょう。また、心の中にささやくものを感じて、なすべきことを知るでしょう。混乱と大きな試練が渦巻く世の中にあっても、平安を感じて生活することができるでしょう。皆さんは靈感によって、行うべきことを知り、それを成し遂げる力または能力を与えられるでしょう。……主の約束を忘れないでください。『あなたがたは高い所から教えを受けなければならない。自らを聖めなさい〔つまり、わたしの戒めを守りなさい〕。そうすれば、あなたがたは力を授けられ……るであろう。』（教義と聖約 43:16）」（『聖徒の道』1991 年 7 月号, 36）

エテル 7 章 争いが王国に入り込む

• ヤレドの兄弟は、王を持てば囚われの身に陥ることになると民に警告し（エテル 6:22-23 参照）、実際にそのようになった。ヤレド人の王キブと、後にその息子のシュールは、どちらも敵対者に捕らえられた。ヤレドの兄弟の預言がどれほど速やかに成就したかに注目する。

エテル 7 章にはヤレド人の長い期間にわたる歴史が記されている。モロナイはその期間の出来事から主要な部分だけを自分が短くまとめた記録に書いている。モロナイは彼自身の民との比較と、わたしたちの時代にとって特に価値のある教訓を強調している。

エテル 7:6 地理に関するモロナイの記述

• ヤレド人の地とニーファイ人の地の地理的關係に関してモロナイが残している情報はきわめて少ない。「しかし、モロナイはヤレド人の『モロンの地』が『ニーファイ人がデソレションと呼んでいる地に近かった』と述べている（エテル 7:6）。モロンの地がヤレド人の国の首都であり、ニーファイ人のデソレションの地が地峡の北側にあったことから、ヤレド人の大部分は地峡の北側に住んでいたと思われる。」（ダニエル・H・ラドロー、*A Companion to Your Study of the Book of Mormon* [1976 年], 321 - 322）

エテル 7:23 - 27 シュール王の民は預言者の警告を心に留めた

• 主はその優しさと憐れみにより、シュールの王国の民に警告を与えるために預言者たちを遣わされた。最初、民は預言者たちをののしり、あざけったが、預言者たちは義になつた王が出した布告によって守られた。その後、シュールの民は預言者たちの警告を心に留めて悔い改め、その結果、預言者たちのメッセージを拒んでいたら招いていたであろう滅亡を避けることができた。

大管長会のヘンリー・B・アイリング管長は、主が御自分の子らにその悪事に関して警告される理由について、次のように説明している。「主は憐れみ深い御方なので、僕を通して民に危険を警告されます。この警告をする召しは、より困難であり、重要です。最も価値ある警告は、民がまだ現実になると考えていない危険に関するものだからです。」（『リアホナ』1999 年 1 月号, 35）

エテル 7:23 - 27; 9:28 - 31 預言者とそのメッセージは度々拒まれる

• 預言者が度々あざけられ、ののしられるのはなぜだろうか。十二使徒定員会のロバート・D・ヘイルズ長老は次のように説明している。

「預言者は、神の律法に違背した場合の結果について頻繁に警告しなければなりません。世にあって、人受けすることを説いたりはいしません。……



どうして預言者は人に好まれない戒めを宣言し、戒めを拒んだり曲解したり無視したりする世の人々に悔い改めを叫ぶのでしょうか。その理由はとても簡潔です。一度啓示を受けたら、預言者に選択の余地はなく、ただ、神が世に

告げるようお与えになった言葉を宣言し、改めて強調するしかないのです。」（『聖徒の道』1996 年 7 月号, 44）

• 七十人会長会の L・アルディン・ポーター長老は、人々が預言者の勧告を度々拒むもう一つの理由について説明している。ポーター長老は、人々は預言者の警告によって選択の自由が妨げられると誤解していると述べている。「預言者が、明快に確固として話すと、わたしたちから選択の自由を取り上げようとしている、と不平を言う人がいます。わたしたちには、今までどおり選択の自由があります。しかし、わたしたちはその決断の結果を引き受けなければなりません。預言者は、わたしたちから選択の自由を取り上げるわけではないのです。ただ、わたしたちの選択の結果がどうなるかを警告しているのです。……こうして警告してくれる預言者を非難するのは、何と愚かなことでしょう。」（『リアホナ』2000 年 1 月号, 79）

エテル 8:1 - 12 ヤレド人の中の秘密結社

• モロナイは駆け足で要約してきたヤレド人の歴史を少し中断し、この民の中に秘密結社が作られたことについて非常に詳細に語っている。モロナイがそうにしたのは、ヤレド人の社会においてもニーファイ人の社会においても完全な滅亡を引き起こしたものがまさにこれらの組織だったからである（エテル 8:21 参照）。もしわたしたちが悔い改めないならば、秘密結社は今の時代においても社会の滅亡を引き起こすだろう（23 - 25 節参照）。

エテル 8:9 を読むと、ヤレド人は先祖が旧世界から携えて来た記録から秘密結社について学んでいたことが分かる。これらの記録には最も初期の秘密結社についての記述があったと考えられる（モーセ 5:29 - 33, 47 - 55 参照）。ヤレド人が持っていた記録には、「世界の創造とアダムが造られたこと、そのときから大塔に至るまでの話」が載っていたことが分かっている（エテル 1:3）。

ヤレドの娘が父親のために王国を取り戻そうと企てた計画を読むと、悪人たちがいかにして人間の弱さに付け込むかがよく分かる。ヤレドの娘は自分の美しさについても、エーキシが自分を手に入れたいと望んでいることについても、よく承知していた。父親が権力と利益を取り戻す助けをしたいと切望したこの娘は、邪悪な企てに喜んで加担したのであった。

エテル 8:18 - 25 秘密結社の特徴

• ヒラマン 6:18 - 40 の注解（258 - 259 ページ）を参照する。

エテル 8:22 - 26

モロナイはわたしたちの時代の人々にどのような警告を与えているか。その警告を心に留めるとき、あるいは無視するとき、どのような結果を招くか。

エテル 8:25 サタンは欺く者であり、「あらゆる偽りの父」である

・主は「真理の神であり、偽りを言われること[がない]」(エテル 3:12) のに対して、サタンは「初めから偽り者であった……」(教義と聖約 93:25) 主はモーセに次のことを明らかにされた。「サタン、すなわち、あらゆる偽りの父である悪魔[は]、人々を欺き、惑わし、またまことに、わたしの声を聴こうとしないすべての者を自分の意のままにとりこにする者[である]。」「(モーセ 4:4)

十二使徒定員会のダリン・H・オックス長老は次のように説明している。「サタンとサタンに従う者たちは、今も世の人々を欺いています。……サタンが用いる欺きの手口は、音楽や映画その他のメディア、きらびやかな快楽など、魅惑的なものばかりです。サタンに欺かれた人間は、その力に屈してしまいます。」「(『リアホナ』2004年11月号, 43)

エテル 8:26 サタンの力は義によって阻むことができる

・福千年について語った際、ニーファイは次のように説明している。「[神の]民の義のために、サタンはまったく力を持た[ない]。民が義のうちに住み、イスラエルの聖者が統治される[からである]。」「(1ニーファイ 22:26) モロナイは、サタンの手法を明らかにする目的の一つは、「サタンが人の子らの心を支配する力を持つことなく、彼らが絶えず善を行うように促され[る]」時が来るのを待ち望みながら、悪を排除することだと述べている(エテル 8:26)。



預言者ジョセフ・スミス(1805 - 1844 年) は次のように宣言している。「わたしたちが許さないかぎり、悪魔はわたしたちを支配する力を持ちません。わたしたちが神から来るものに背いた瞬間に、悪魔は力を得るのです。」「(『歴代大管長の教え——ジョセフ・スミス』213)

エテル 9 章 大いなる繁栄と悲惨な罪惡のサイクル

・エテル 9:5 - 12 で、秘密結社が再び起こった結果として多くの人々が滅びたことに注目する。15 - 35 節には、モルモン書全体を通して幾度も繰り返されている次のパターンが見られる。

1. イーマーとコリアンタムの義にかなった統治の間、民は非常に繁栄した(15 - 25 節参照)。
2. ヘテの統治の下で、民は秘密結社に加わり、悪事を行い始めた(26 - 27 節参照)。
3. 主は預言者たちを遣わし、民のひどい悪事について警告を与えられた(28 節参照)。
4. ヘテの民は預言者たちを拒んだ(29 節参照)。
5. 神の裁きが民に下った(30 - 33 節参照)。
6. 民はへりくだって悔い改め、主は再び彼らを祝福された(34 - 35 節参照)。

こうした繁栄と罪惡のサイクルの中で、ヤレド人は、民が富に恵まれながらも義にかなった状態にとどまることができることを実証している。ヤレド人は義にかなった状態と繁栄を 100 年以上にわたって保つことができたようである(15 - 25 節参照)。イーマー王は主にまみえるほどに義にかなった人物であった(22 節参照)。付録の図「義と惡のサイクル」(398 ページ) には、高慢のサイクルを描いた図が掲載されている。

エテル 9:19 ヤレド人の地の動物

・ある学者は、ヤレド人の地に象がいたと述べられているが、後にニーファイ人の地に象がいたとは述べられていないことについて、次のように書いている。

「モルモン書の中で、象はヤレド人に関する記述の中でのみ登場する。これは非常に意義深いことであると思う。なぜなら、紀元前 15 世紀にはよく見かけられたこの動物が、紀元前 5 世紀には見られなくなった理由がはっきりしないからである。わたしたちに分かっているのは、紀元前 15 世紀から 5 世紀の間に、アジアの広範囲において象が絶滅しているということである。モルモン書の記録に基づいて考えると、アジアと同様に新世界でも、象が絶滅したものと思われる。残されているのは、アメリカ大陸に象が存在したことを証言する人々の記録だけである。」

象に関して述べたこの考察の中で、著者のヒュー・ニブリーは、マルコ・ポーロが自身の旅行について残した記述を引き合いに出して、ある事柄について説明している。マルコ・ポーロは、その記述の中で幾つかの物質について書いており、これらの物質には名前があったが、彼の母国の人々

にはなじみのないものであった。ニブリーはポーロの経験が示している一般原則を、モルモン書に登場するわたしたちの文化では知られていない動物に当てはめて、こう述べている。「マルコ・ポーロはコビアン^{コビアン}の民について、次のように語っている。『彼らは鉄、アッカラム、アンダニカムを豊富に持っている。そしてここでは、よく磨かれた鋼で、大きく美しい鏡を作っている。』ここで特に注目すべきことは、中央アジアにおける鋼細工の進んだ技術ではなく（これまで見てきたように、確かにそれは重要なことではあるが）、アッカラムとアンダニカムが何であるかだれも知らないという事実である。もちろんマルコは知っていたが、ヨーロッパには存在しないものであったため、それを指す言葉がなく、彼は現地の名で呼ぶしかなかったのである。エテル 9：19 に出ているクレーロムとクモムについても同様である。これらの動物は、ニーファイ人には知られていなかったため、モロナイはその名前を訳さずにそのまま残しておいた。あるいは、ニーファイ人には知られていたが、わたしたちには未知のものであるため、わたしたちの言語にそれらを指す言葉がないのである。それらは『人の食用となる多くの動物』であったとだけ述べられている。」（ヒュー・W・ニブリー、*Lehi in the Desert and the World of the Jaredites* [1952 年], 217 - 218）

エテル 10：5 - 8 リプレーキシ王の悪事と圧制

・エテル 10：5 - 7 には、リプレーキシ王の統治について述べられている。リプレーキシの邪悪な統治と没落は、邪悪なノア王の統治と没落に非常に似ていた（モーサヤ 11 章参照）。両者の以下の特徴に注目する。

リプレーキシ (エテル 10 章)	特徴	ノア (モーサヤ 11 章)
5 節	非常に不道德であった	2 節
5 節	民に重税を課した	3 節
6 節	広大で見事な造りの建物を建てた	8 節
7 節	人々の労働に頼って 豪華な生活をした	6 節
8 節	自分の民に殺された	モーサヤ 19：20

イザヤは「この民を導く者は、これを迷わせ……る」と警告した（イザヤ 9：16；2 ニーファイ 19：16）。義になっ

た王であったモーサヤは、後に自分の民に対して、王を持たないように命じている。「過去の多くの人の罪は、彼らの王の罪悪によって引き起こされた」からである（モーサヤ 29：31）。

エテル 10：9 - 34 非常に高度な文明

・記録は限られているが、エテル 10 章からはヤレド人がリブ王の下で非常に高度な文明を享受していたことがうかがえる。ヤレド人がどれほど繁栄していたかについて、モロナイは次のように述べている。

1. 「彼らは非常に勤勉であり、売買し、互いに交易して利益を得た。」（22 節）
2. 「彼らはあらゆるあらがねで物を造った。彼らは金や銀や鉄や真鍮^{しんちゆう}、そのほかあらゆる金属を造った。……そして彼らはあらゆる見事な細工を造った。」（23 節）
3. 彼らは「絹布とより糸で織った亜麻布を得ていた。また……あらゆる織物を作った。」（24 節）
4. 「彼らは地を耕すあらゆる道具を造り、すく道具、種をまく道具、刈り取る道具、脱穀する道具を造った。」（25 節）



ロバート・バレット、© 1986 IRI

5. 「彼らは家畜に付けて働かせるためのあらゆる道具を造った。」（26 節）
6. 「彼らはあらゆる武器を造った。また彼らは非常に入念な造りのあらゆる細工を造った。」（27 節）

モロナイは次のように結んでいる。「彼らほど祝福された民……はなかった。」（28 節）

理解を深めるために

- ヤレド人が約束の地への旅で主に身を託したように、人生において主に身を託すとはどういう意味だろうか。
- あなたは自分の人生で、どのような主の深い^{あわ}憐れみを受けていると感じているだろうか（エテル 6：12 参照）。
- サタンに欺かれないように助けてくれる予防手段として、どのようなものがあるだろうか。

割り当ての提案

- エテル 6：2 – 12 で述べられている旅を、わたしたちの現世の旅と比較する。
- エテル 8：13 – 26 から、秘密結社がもたらす危険について述べている節を見つけ、それらの危険を要約する。次に、同じ箇所でもロナイがわたしたちに与えている勧告を要約する。